

# 入曽地区の中学校の統廃合に関する具体的な提案

## I 入曽地区の中学校の概要

別紙のとおり

## II これまでの検討協議での主な意見等

別紙のとおり

## III 入曽地区の中学校の統廃合の必要性

### 1 学校の規模の視点からの必要性

#### (1) 入間中学校

中学校の適正規模（12 学級から 18 学級）からすると、小規模校化の状態であり、将来の推計からも、若干の生徒数の増加があるものの、小規模校化の改善は図られない状態であります。

#### (2) 山王中学校

中学校の適正規模からすると、小規模校化の状態であり、将来の推計からも、生徒数の減少が進み、小規模校化の改善は図られない状態であります。

#### (3) 入間野中学校

中学校の適正規模からすると、小規模校化の状態であり、将来の推計からも、若干の増減はあるものの、生徒数は横ばいで推移し、小規模校化の改善は図られない状態であります。

### 入曽地区の中学校の生徒数及び学級数の推計

学 校 名	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
入 間 中 学 校	277( 0) 9( 0)	284( 0) 9( 0)	318( 0) 10( 0)	315( 0) 10( 0)	332( 0) 10( 0)	314( 0) 9( 0)	312( 0) 9( 0)
山 王 中 学 校	351(11) 10( 2)	332(11) 9( 2)	303(11) 9( 2)	324(11) 10( 2)	312(11) 10( 2)	317(11) 10( 2)	286(11) 9( 2)
入間野中学校	302( 0) 9( 0)	308( 0) 9( 0)	326( 0) 10( 0)	333( 0) 9( 0)	344( 0) 10( 0)	317( 0) 9( 0)	300( 0) 9( 0)

平成 23 年 5 月 1 日現在 （単位：人）

注 1) 上段は生徒数、下段は学級数で、( ) は、特別支援学級で外数。

注 2) 学級数は、中学校 1 年生は 38 人、2 年生及び 3 年生は 40 学級の規定にて算出。(実編制とは異なる場合がある。)

注 3) この推計表は、平成 23 年 5 月 1 日現在の年齢別人口を基に、翌年度以降年齢を 1 歳ずつ進行させて作成したものであり、自然増減及び社会増減等の要因は加味されていない。

各校とも適正規模を下回っている状態であります。「Ⅱ これまでの検討協議での主な意見等」をふまえたなかで、集団教育の充実、教科学習や指導の充実、学校行事や部活動の充実等を図るためには、統廃合により、一定の規模を確保する必要があると考えています。

## 2 学校の施設の視点からの必要性

### (1) 入間中学校

昭和40年の校舎建設後、46年が経過し老朽化が進行するとともに、校舎の耐震補強工事及び冷暖房工事についても未実施です。また、部活動に密接に関係する校庭については、入曽地区の他の2校に比べて半分程度と狭隘な状態にあります。

### (2) 山王中学校

昭和52年の校舎建設後、34年が経過しています。校舎耐震補強工事は実施済みであります。冷暖房工事については未実施です。校舎の普通教室の保有数は31教室であり、入曽地区の他の2校に比べて比較的多い状態にあります。

### (3) 入間野中学校

昭和63年の校舎建設後、23年が経過しています。昭和56年の建築基準法の改正後の建設であり、新耐震基準により建設された校舎です。冷暖房工事についても建設と同時に実施されています。

限られた財源を有効に活用する中で施設の改修を計画的に実施するために、また、施設の整備水準、特に学校行事や部活動の充実のために校庭の規模の格差を解消するために、さらに、適正規模に見合う施設の収容能力を確保するためには、統廃合が必要であると考えています。

## Ⅳ 入曽地区の統廃合の具体案

### 1 学校の適正規模の視点

入曽地区の中学校3校のいずれもが、適正規模を下回る小規模校となっています。いずれの学校を統廃合しても、残る2校については適正規模を確保できると考えています。

## 2 学校の施設の充実の視点

- (1) 早期に施設の改修を完了させるためには
  - ・ 入間中学校については、校舎建設後、46年が経過し老朽化が進行し、また、校舎耐震補強工事及び冷暖房工事が未実施であることから、工事の実施には多額の経費が必要となります。
  - ・ 山王中学校については、冷暖房工事が未実施であることから、工事の実施には経費が必要となります。
  - ・ 入間野中学校については、新耐震基準により建設された校舎であり、また、冷暖房工事についても建設と同時に実施されています。
- (2) 施設の整備水準の格差を解消するためには
  - ・ 入間中学校の校庭については、他の中学校と比べて狭隘な状態にあり、この狭隘の解消はきわめて困難であります。
  - ・ 山王中学校の校庭については、十分な広さがあります。
  - ・ 入間野中学校の校庭については、十分な広さがあります。
- (3) 適正規模に見合う施設の収容能力を確保するためには
  - ・ 入間中学校については、普通教室の保有数が19教室で、適正規模の学級数は確保できますが、多目的教室や少人数指導教室等の確保が難しくなります。
  - ・ 山王中学校については、普通教室の保有数が31教室で、十分な教室数が確保されています。
  - ・ 入間野中学校については、普通教室の保有数が18教室で、適正規模の学級数は確保できますが、多目的教室や少人数指導教室等の確保が難しくなります。

上記1及び2を踏まえて、「入間中学校」を廃校の対象とし、今後は通学区域や統合校の施設整備等について検討を進めていくことが望ましいと考えています。